し[illegible]

新増犬筑波集　淀川ドモ号

山崎の宗鑑の集られし犬筑
波の名をしたひて新増とは云
犬とは犬桜犬蓼と云がごとし
筑波とは連歌の式云人皇十一代
景行天皇の御子日本武尊
にゐはりつくはをすぎて幾
よかねつると上句をあそばし
吉例にて連歌も始りけり
近代二條の関白殿筑波集
とていふへき句共あつめ
られしかと対して文明
の比宗祇あつめられし連

誹諧新筑波と号られハ誹諧
を犬連歌といふによて宗鑑の題
をかへ又筑波と云ハ本のしげ
き山の惣名なり又常陸國乃
名所にもありそれハ天照大神
此山にて紫の筑琴を引給ふ
小嶋の浦波あまたにて飛の
おりし此琴に着たるにより筑波
山と号ると

春

碁盤の上にも春ハきにけり
鶯のすむこゑりといふたよりの

此句今まてハ作物といふ字入
あられハ同意になすへきよし
も連歌師にまきれぬやう
の吟味あるへきにこれ撰者さ
なのる俳諧をもまた俳人も
わきまへし事如此
をはすへ連歌のための狂言家
連ハ開付同意も指合もわきまへ
せむ俳諧ハ一二句あてしよ
みあしてあそびしとみえたり
されハ此集ハあれバとて前付
不可用し又此名句とも一句
残く悉発句付句をもつて挙

人の顔は招く事なり三句
目は行やうは猫んは覚悟なせ
させんたか。おまづき嫩らなが
ら。かきくらん行は
まづハ乗せより雷は梅うえ
是ハ移細卯り出のよふく
みせて。ぼそりたり作花となり
庭の夜すまそハぬまさなか
ほか姫は素立なり原種して
おほぶくやれこ五は神達
ほかひめも。うみなれハされ
よく付行は
あるおれりやな餅ぐふ攻

梅り亀はまつ鼻へ入来立て
目口あれぬ苔はあさ東風
目と口とはハぷさしたなゆへよ
鼻へ入なり
あてしのためはわるか然なり
淵のわうりて洗ふのあがちれ
あそめし脚布はのご供素は野
まづしたなは脚布はよ乳が洗せ
あとよなよのあむこなし今ハ針入るだ
うそはなさくく花は乃み里
将瑠なは蛯はをるひよ梅嘆て
うろんはすならりよふ方いきう
かいたるりよふ僧は将よ立て

鶯の声きゝ折から蛙鳴にと
つまかれあり
雪またあらぬけしきや行
春のやさしく読たりけん
あさたか人のもろ酒飲けん
やけの酒のうんまてこがりやう
くも有なふ同じ火のうきは
あれどもすうしべ
私のおとなふ花は見えかう
我かとの人はあらじと申せて
こぞしこそはものてし袖
うらひの身は人すまれぬなあり
もとより人はならん

下手はよくもと云字は筆の誉れ
目鼻なくしたんざくの段
ゆやの短冊の段に哥は付
舞あまといふ哉
ひけれ花の梢もそれ
引よせて折けり春風哉ら
出るみかはらの云生は猿
これも云生の狂言ら称す合点
ゆるぬなり
春は鄙なるもんがき始せ
まつけふしら角はぞきる
あくつかふ若松はしち鶯らち
はゝくと云まりしは言いをら

御遊にも花をめかり五十の年まて
裲きつ風達ハく
吹く風のふりてあれかし
花ぞ色いろを舟に組上て
とこ世の様ゝの居りとも
居をかけ舟また人を物
音あれハ有り
夢の間にもいろいろあるまし
花に物にこそかハ色に於かれ
ぬれつくみたんれてれ錦
おもやかりしる春の申楽
花風ちりやたつとも吹たて

春の宗もみなあかりかち
ぬかつまとあかりたかあり
玉藻浮の糸の春柳の糸
春風にみたれし海の松ふかり
永日門よたてる須磨
須磨の門立とはいふそハまの
ふかき色さへゆへあり
鹿けゆきにやとるらく
水鳥の羽毛の氷をわけて
春日に樹よりわくる鹿
これハ鴨じて水に入る鶯
本よの外には年代の何
てなつかし

あらめしみかんくにうつうぬ
正月の茶の子にと残るきハかり
よはうちうりも道の年玉
宇治の丸椀名物なり

夏

山かきひあかにあつく夏
文月の夜は窓よおそき涼まて
五月やさいかも座敷あかく人
散人や孫は走あかく祈なり
五条あたりに数きかぬ庄
夕貝は家のかけしは打ゆき
汁のこはくいおいらか夜れ日
ひさこはけくいて踊者なり

守なしは秀さかりも秋ふう酒
夕貝の宿の亭主は粗合て
炭をりくにけもやあけき日
夕貝は炭汁あり犬事は亭主
都合はまていなり
勧進聖辞ハえくノ介す
勝よなれひさしれけなりさかて
あけやきしれよの継ハ粉く
振舞は汁のかねさらよ夜れ
夜継明たるなり
おもね前よ尤ほさらしなわ
いよいて居こ風庵ハひっかん
むろしく秋さ作業の冊

むかしくさなりよ。きさめの声り
まいりなれし座頭之
地蔵しられ飯給くいくや
たぐいまれたてはやけのらだせん
琴の音やふりてあそぶ夜の日
あとの音やうふうしだきしの地蔵
か恋よしはそうして文章き
夜の日ふ給くおせ代牡丹
扇線もひやの猿沢のいけ
ひやすふしぎあつきんなれ今日は之
たびの衣はつゆのは葉平
伊勢物語のところあり
女も具足きながらとよう作

姫ゆかれしも草ぎりに花落し
今は具足よ草すり用付之
声しきてれなれり能所
ひめゆりひめれの草乃
をかしけり
節あいさにからみよりすま
夜川のせきれ海老のひまとをし
行これでもひや能を鵜つかひ

あかきうにたくひょたん
山ぶきれ宿よみれなみ入る色
しづかなれしるよかる
くわみなれ花よこりなれまり

わりくへはなかるゝにつし
竹の子の陣に座へ折れさして
えかくにさかこれ乃あれは梅
筍ありあ縁墻へ出る梅根はれ
とりけり

おりふ襷ようゑうつれはなかり
前句一句の理あり今は光を蝨之
虎のふやすむ蝦蛄の肉に稀て
貴客の猫は家をもちむかふ
前句は人の猫をかはる猫かぬかふ
ふとらあしあり

秋

すゝく風の萩よふかく茨
鳴けむもむしやぬけてようらん
うそれの葉みあしめて浮む
暁れむしよとりなりのえ葉
うそてつむへのぶは類ぬかふ之
十王たちふ林風ぞふく
浄それ猿は組かふ月嬰て
要露よぬのてし浅草茶
茶釜に情張とりふ茶をぞ浅
花ゐと足名あり
もれ家ふもゆくかふやく
月星は嘴されのたびよて
まゝもゆるしく蕨萩
前句の人の様かきゝ海きたれ

さりとてハ月に星八千尊者達も
知らぬ海中く
京都やひとつ丸の宿代から夜
大事をうさきて月も交分よ
さりのこゑらしりふに客尊よ
月夜よ松蕈のみてゝ分新なり
むさしのりさ分へ見ればみよ
かのとのく浦へ月毛よて
おらへの宿へ役玄乃何まゆ
源氏の右将月毛の駒出てあり
の影りとひ粉しき事なり
しまれ疾風雁のいさきん
河内もと恋月ハあかさく

紅葉見にかもとのまつあつき秋
いぬるやらに夕暮乃きを
三日月彼らハあちひハ駒の
さ海のれきさらぬうたに長きよ
来りれくら行よひどりより瀬ず海
あられも小猿ハ栗かむきて
八重ハとされ山の秋の暮
九重日小雨の花うくてむひ
ひさ分りしまり
さかれかは宿の盛
七夕も手分へよりをせいへん

矢数ハ一昼夜といふ作日の内に句
子のむまれしより数ハ千句を付る
あれハ
両吟ハ独吟に発句に次
二冊四千句ともいふ也吟て
此付句用付有り
公家も俳諧の分俳諧のや
搦の巻の折有り
さこえいふぶるきり上途
ひさしすゞ為の草花小姫あお
すゞのむて絹之織まゐ
小姫ご殿が絹ハお作まゐ寸作
ふくらむ遊の袂ハ秘蔵すること

おそれ有ぞ入てよみと
足あるふたつハ氷に月さして
むさや風の俤にうつ作の秋風
るたゝいよ作も有り
らへようしく下にさして
此前句一句の正体有て作り
りのあり
三ヶ月の句ハふつうに気みて
此三日月の句無言
すゑうけき志しみゞく物
三ヶ月ハ駒針またとえん
とかなりみゞゆそへつがハ
此ハ色し

蕉ハ破れと破(やれ)風にはよ
　はくかのもせおよ家破れ付て
せこまの化女(けぢよ)ハ寂に消(きえ)つゝ
芭蕉(ばせを)の女と成りたはむれ
くものふるまひにて付
　口なしにさくらほころふあはれ
菊(きく)の花とて耳(みゝ)もあらバや
重陽(ちやうやう)に酔(ゑい)て何(なに)を独言(ひとりごと)
九月九日にて菊に付独言
いへと菊(きく)にも耳なけれバ
きく人なしとし
冬
　子共(こども)や扨りかまりにくらうん
　あすの末にてけふはころ際(つい)ハ
くらやなさくらはを丸山中
山中の月そめふよ見ハ者
あれハあすの比なるへし
　月日ハ下に我ハ孫より
暦(こよみ)にてやすまで作らぬ古嚢(かうなう)
冬こもり油ありてかいたり
三嶋こよみとなり古(こ)ふ嶋ハ
おいたしれ傍(そう)にて付なり
　一寸二寸小くらむ表(おもて)れよ
当道(たうどう)の子れくにわ人ひえて
此句(く)風意なりかるれんむき
ますべ

ちいげち阮売でゆく年
老人の身ハひゆかしのあかり
ばちら打からちむけ給ふれ
ちんぶのちいと惟みしもさて
こゝろそちど給ふ伝大師講
飯のちど給ハ七経と給りのとぞ
天台大師霜月廿四の大師
講あり
ひたいの志く給ひのあふ給ふよ
行年給ふぞやおもひだされ候ハん
こんな給ハせよう給ふのふ
恵美八せよとも金春給ふ句
よすなあり

袖も帯も雪にしよごれあり
我宿のくらいなおなしめひた
いきにくれ字けしあひし之
ちり紙られあかりのちいじほよ
ちり紙りそいか給ひ付給ふあり
雪刀ふこゆき宮人の袖
ちくやかなうときぬ汁先生きて
すりして途中焼うたふ之
うみきぬくわきてあしかは
りのもえうぬうしあり
歳
薮給ふでわてよびひ給ぶは
ありれ危の志くしさむ給らん

行ふこともなしとぞ暦家に
伝へたり行は以之
此句誕言なし
そこ讃にはやとハいえとも先
いふと云字前句にあり
我等たゞよみあやまれ唐船
そこ讃へハ唐伝流くありとせ
もせばたゞよふ母とすらわ
陰陽のこのせどのこし さ
云宮のあらむ女子みゆるて
せんくにとは中の一つく
一徳六宮とすありせんうこ
すれハ総じて中ハまぬれ中
あり
人間万事いつれも中
寒暑かはりをもてハさいはひを
よろこびあまりやはすれ禍
是八式三書にあらはあらは
ろうしあれやも取所云詞
とりけなり
潤川のうへふみなくく
此句誕言
乃あらんも此つけつくり
都やりんもせり頭書
文せハ此いのは取あり又

長居ハうけ法てかく云ゟ
乱合し様もあられぬ事
さすそ斗かなハ結まれし
志んだいも此碁よまかせ候
いらぬ所ハ指ふてかなふ物なり
ろ人ハあく同れにゆかぬ我中
恋ハとくとかの力れなくよて
うみ松気ハのらよかぞよの紀
砂石のうへてとう法けよろわ
おはなね恋成とゆぞおうき
我よりも大男兄よだきすて
年ハゆう経と志れ大頂越

男乱よ遊女がだき法く之
肉ハあくてそとかまれろ
此句重四神俳物なるべし
志ら経た女なりて俗物よ成ハ
分相応家も入聟ハせど
女の家りそ何かなして
付くり
恋ハう花進ややうつそぬ道
ハきんぞ思ふで云につまかく
て
枕すなぞくなり経う山経の史
ハ万延どうとさうあんなり
堂九所まの恋成す法ころ
血川さ成音きこぬ状結そへて

あたらしみに誹やこのまし
一句ハ心奇にて仕立より
人の信やあらかになるらん
五寄の秋に霄嵐にひろ價わ
えだたわゝやぬりし花白ま
たまづさハうあしびあま来なえ
おゐよほくゆりのあり
ふびばのべさ俗ゆかめく霞
きぬくま大あ縁にすひて
痔わりやくも執ん心やきん
屏風うしあゆ恋ハさびかび
笑やいよおつがひくれうみさと

むやしぶよつがひと付分半
用付之今ハ猫へし
一句付合かそかに附けてよふ
寄合ハいつがひて定むりの之
盡かもへの道ゆたまりさ
昔よりそ其文月の恋の道
たまづさハ文同ありり今ハ
あいて付
きのふの徽神や宣得る
昨ハ六月晦日あり業平乃
恋せしれ奇山にて付あり
命志びしうしそくと以て
君ハゆんよ背庭まじいとあれ

志茶ちやれとてもしたらは
塩茶ハ胃の毒と腎ゟよあり
きのえ子あしハ粉さの袖よ
甲子の夜ハ店いあいせぬそまて
めでたくあがりやうは待ん
鍬よかまへ打うけぬ中茶王
くどけれたハゆる風まおとこ
ますらとこに志実小ハ女のごけ
はりしゆへよ弁せおきこが中
多成らとあり
お坂家さゆゑかちかく
東海のたかむすめとか契ん
此句も用付めれたら前句が

これハ付たるハておゝなりとて
恋は上より付やう下より付やう
これにてぞ此味見えし
世にこふても見れたらハ葉草
伊勢物語よ人のらみてても
それさとにほうすなんやまべく給
ゆへあり

雑

公家と武家とハ二ツらせ
立つけ縁なり下へおうけし
将康のあふの様やいらん
給康の山よ鬼の名はなるしれ
とふなり煤はしめ時なる

下乃汀なり
四国ハ海の中によりあれ
漕ぐ舟ハ俵なり浦にて
播まふ摂ちや和泉高くへ
くのゐよハ名あるゆへなり
雲ぶかりや人ハいふらん
修こと花にうつた蜻蛉にて
薬師や仏ニハかはす札草
蛸よ薬師ハ弦付修ふ札ハ
玉草ゆゑ付なり
ふかり風あつくもぞあるハ
背ひ玉みづけまた光なし
古き経の帖いも縁よ

玉帖よ付けり
ふかりて法あてきいめせなり
書風木のこすゑにも麻つるべ
ふか咲なく田楽にやあれ
ハ麻ほろべハ田ゆゑ付まり書よ
くはハ蒼ゆて付之
ばくち打よう飛ハ源なれ
ちりぶのさいめ源家に幡廻じそ
のまほまひまのわるき丸薬
栽荷きうし縁まふね酒ハあり
おやのゆづり代なぞあばくち
あるふの居ばつかしを家源とて

武家の始ハ六十八代より重
代の太刀ハはじまりけり
むかしより清家入と見え
長刀ハ野太刀といへるより
あらはにハ代りて身に付さ
長刀ハ太刀よりやはらかに
みそかにハ家にあり
うけ太刀に御辞なしとぞ申しき
重代の御太刀も御当所にさだめて
公そなはれぬ事とて後撰集
六十代の内後拾遺集八十代めよ
あらためて続後撰集に続なれ之
これや末世の大師あるらん

うわなり打ハ後へうたるゝとされ
三途の川でとらむとも見え先
女の死してハ始に訴そめたる
男ハ三途川をも手に取引とゞめ
と仏説之
ひとりとハ始にゆがみ所に説
閻魔の前ハ文殊四ツの太刀授て
あらみたいのりすれも智恵之
閻魔王ハえらび太刀ありてあるへし
らう文殊ハ智恵付合なり
祈にも太刀を授なり
塚の内よりけん人出て
そのけ太刀つき掛ちて

衣に用心(ようじん)する時ハ猿(さる)ひきまはし
袖の柿(け)ぶ毛(け)ぬきにて太とかけ
猿引ハ大刀などくたるの付合
逝去(おけさる)ハ大なり
賊(たう)ともに身にそはぬ雅持(もち)より
令絶(こころつろ)のちかれをつまや
はかり気たまが(ゆう)せをたまん
真(ま)盤(かり)見でひま令絶のちから伏
ちかとうたる紙(のふ)のちから伏たまふ
せかよ合て傲(おう)よ長(ちやう)く死(そう)さるや
と抜(こうえ)し祈(たい)なり
おひつりもくらやおかみん
高飛(きうや)ひてよれ紅(おと)の鎗(やり)のもち

人のおとこらひのまうら氏家の時
わかふうとや席人(ひづき)のおとこらは
であり飛(ざい)科(くさ)人攻京のまち
もえれよハけいごあ備なり後の
鎗(やり)ひとこれなり
人をつきたほすハのがれど
あかれむもこゆうるやつくの志でれ山
あげぬり致ハたゞ時のごり
時の高ハ郭(かとくごけ)なり代るみて
あぞの山ハ付すなり時の致式あ
ぐなみ鑓(やり)ハ付すなり
そび人菓(くまり)ぶ打ち出す簾(たれ)円
いとむろりんよるそおりたるん

用付なり
ちごの啼よ次の寝かな
児様ふりして思ふよかな
ちなみし乃来む時ハ来りけり
遣く伸なり
ある夜ふも碁将や打らん
遣くすの岩風波またにこゝ立て
碁よこうも今ハ用付なり
まちせこの来てとつむだし亀
まちせこハわが男それ娘の
のうの詞出てあんまりく
わさこハその夜ゐらうあれ
真をといふ用らり枝で

泣あげくせづくて来なれぬ
ざくといふて真ち成なむつ
ぢ付なりわ成なく波ハ泣なる
げく時か成地よなく波之
往生人ハいふふなゆるん
来向風あるこ念成ふし
あげる風山乃大風乃ころ
あげるの山ハごと来向風ちよ
くろとなり
むさし成捨て飛でち行
無芸がつなりも蜂や来つかげん
小せ山伏のかゞりいちなせ
ぎゞしか鎗なし山伏のちぎを

がりにつけてたゞしく筆にまかす
蜂ハ呉子退月が古筆よりおこりしに付合
家にハや格合ありて論なし
蓼者前よりハ蜂の巣
につけて幾く座なる紙にハ書べからず
蜂ハ一切の花の書べき事すいやう
てうつよすすのあり
どんぐりハ紙に書き花ぼうの
四人あらバあふとなへよ
傍みハ経の外すれバ春なる
蛸の外ハ経よむよ紙たれバも
のあり
姫られなバ人地よすまされ

おのくもあらず方や凡そ接て
人ハきなどいふよ力ぬく
ど八今ハ付べからず
紅葉ありて好能ハ筆をさ
春よ大れ花并　色に秋の牡
山の文に蕃ハ八同に松
作けぬるへおどろきもある
よう闇桜あかざるあらざや
のおるよ。此能乃名あられ
すべても同じにあらばたとへバ
高砂にハ緑なる八同じなり
寝草藍なる八付そへし
らんそれも深きにふ詞そらと

云字なしと云て悪(あしき)やうに思ひて
人はよろこふ赤(あか)き所に用乃
あれ共のゆへあれなきと云よ
八朱丹(しゆたん)色よ紅紫(こうし)等(とう)も宜き
よくこまかに分別(ふんべつ)
わづかなるゆへ赤子(あかご)ぢ新れ来(まえ)
打溶(とけ)たるの家様(さま)わするさて
萬(なま)とあゆやまれ思ひつま
人の更代(こうたい)相まじはるなる事
例(れい)多(おほ)くあるゆへなり
ふかくおもたらしかりけり
皆人のまよひやすき供養(くやう)供書
たゞこ法(ほう)をせし吉乃山てう

当世(たうせい)きれたらぬたゞこの代
小の心ならり遅(ぶ)着(ちやく)侍房
数(えん)冬(とう)花といふ名もあり
茂(しげ)り緑は葉や(ちや)くれ
ゆふだちをふくさ餅(もち)に雨降て
此花ひとつ盃(さかづき)の心あり其上(そのうへ)面(おもて)
小菱(この)笠(つき)同(どうい)なるへし
地(ぢ)よりまわりかつきらんの者(を)
世俗(せぞく)は雨降て地(ぢ)ときまるといふ
あり餅(もち)は臼(うす)出(いで)そ作くなり
あらかわの京の茶よれ
道具(だうぐ)やさかしはめて能くらん
鉄腹(てつぱら)の道具(だうぐ)へずよ白

此外道ハ鞍馬ひらけて貴船よ
あて南ハ一字ハ寺なりこうし
のあり両にあゆ所なり
あちへむらんげにちり入せんげ
小児やうれん縁とゆん
天台山よりいきん神交
根本さてハ伝経山あり
きんべ乃むか中あり
山の奥かん何まちかん
菩月よこいし流てろく
ころびておかりか樹れ申
みけてめのかけやうされあり
こゑく蛇ころびてとけたるよ

近江申楽能で下りあり
湖のなきかおりて八景も湖
薬師如来八会ゆかきん
初禰よ入ちる来て白髭明神
よ。叡山の花ちたまのよ。ゆ
ゆきさぬなる。薬師如来まで。
ゆられし古るのあり
神ろりうたうとうりるわ
様らし佛如く八落ちけて
あん称ん先よ言し古寺
どても去家ハいぞて膝をけ
共ありらうに称ひ尊へ

蕭然たりとは火は消えに
天窓のたゝくなる祇園よこう
なんなり
様々書に多き先しうと
萬引代の面ではまちがひては
すなはちぶ八京のまち中
京法もすべ分ましうさけ里
かんかな家々さたご座檀
たぞうにかてお積と云ところ
是は惟喬惟仁のせわくその
時お積の新法叡山と東寺に
てせられしるなり

何とて先旗棒もせん
すげもなく遊風笠お法の立て
高橋くさ分これはるきさ為
すげなきを那気なれども
なれなり高橋くさりたるです
いけなめのうぢぢきなり
わまう蛇の立ずうなしれ
そうれやふよりてられ焼より
もうれぬまも昔もぬめらべ
古代のそろいうくやけるふ
よりてうしへても昔む何なよ
志なり
ゑすミいろしろりおぞりあ

客舎にちかく旅籠屋の泊は
呂律を合て宿とよぶ
當所を出所より兎なん之
戸ば登ぬれハあくらなれ
昭村の丸かまてハふかもたれ
ひらじの釼よなかく腫あ
豆の手のはつハ丸かなり手乃
後ハ亢ありじなり
毛のあ伝なへそびりてぶゐ
才よりよね塲ととハらば成ざわしても
萬る君もをさハ私まよかん
属さし丸肩ぞらりしてすきこに
ひろかはなり

毛丸ゑ痛ハ疒ぬれかり
己の手もに仁る手痛ハ紙紙て
せぬかして同字なり今宮ざ
うんべ
墨ににんてやきぶらぶらん
手疵墨と付るら浸紙と付よ
今ハ二郷の中間ぞうし
佐難成ハ太刀持やうに挽て
世ハ枠ぬれと庭廐すきな
ぬたけき道ぬ者丸新なり
三笠の山成ら伝せい文
天の原古酒のめしせかられて
菜てはな子成かうんなれ

天の岩戸の始よりなればこそ
神楽は酒てのむゆへなり
大こくさまはこのむ山伏
ゑびすさまや鼠よみな金入三文
八年ごし花もさかな
めどことハ八のかずまなり
吹もふかれたはなもすれ
しる一ぱん縁なし総角とへあらう
のおなはも亀よりく
わき笛からばかりに御もせて
われから琴で三味線よりれ
琴ハおきても三味線になりけり
さき笛ハからなるなと升なし

なかなり
吹もふかれずし
山伏の貝まれ鳴ずれ琴も切て
たとりおとこし魔の面おや
吹もふかれずし
吹あ海よかこりれなきき
雨どのおとりや雲こえつん
えゝちは高っておかこりさ
すのなり
まとすなぞれら海は焼山
あめれ気いざ立や気こみなゆん
御祭礼もまつひ五月雨中
続のまつり雨中の気もなり

なんなり

切たくもあり切らくもなし

恐ろしながらかくてこれは我が子之

讒言のやぶの作はれもれず

知らぬ人をさらしたまへは降乃

とべらん我が筆は落るなかり

切らくもあり切らくもなし

はやらなは月ながせ花の

此句蓮飛言

たきそでるめく春の村雨

花よ雨とは村雨の雨で月は

うくのとなり

切たくもなし

仏ごの的矢のにしあぶさ弓は

是は稽古の上るのやうみてを海

ずは集よあれはさて今ぞ

五月雨

みけうのび弥みくの提灯

提灯が宮陵的場の辺と東燈よ

五てくも

いかほまで地蔵茶屋でおとしまへ

戸ば立てをくの辻堂

さうは人なの池出は吹風よ

燈籠みけさじと戸は宮海之

二三百要へらひはやしなり

祭ゆへの宿のあるへかまなりて

咲かぬ櫻かえんもえんなず
花見の衣はゆへに遊もし
落ちれ梢は見えずぬなり
何の家でたりしなやでだ
葉落けぬてるむ神のげずて
風ふ落め紙りくめはやされく
やぶさめ神前出て操よあは
ゆへの落けぬとん紙付たり
よくよう於世言れし望
西行ハ醫ご在れ方もんぞ
操が手ようかは草木
西行櫻と付たり醫者ハ草木
続えてわくりのなり

わくらばみて腰は立たり
やれめ出さかくる手擬じ
ふう出人家は謀れのせめ
のせめも丹練出て敵は打擬じ
たはなり次かてせむべき和
神と悔なり
むかしの山よ夕れきうよ火
歎の志らくすねハ家れ牲は
まはりかむかりハあやし仙薬
淮南王の古事なり
つかはきされハぬめりよう塗
根で入は身ハ本まづとの力よ
前句の風流をそ同意之趣し

あしらんとや魚よる海かこ
蒲鉾ハ絵にても何なりけて
包丁ふとりなんなり
所のあまりた完ハうちく
尺八ハ刀のよ所にしそ入て
此前句の所ハ塚に何よらり
て刀よし
んばそくばなばもらくめみ
尺八ハ楽行にして付なり刀ば
とな所ぬハんばそくぬなあり
雲上にもゆやとれらん
権ハ自在天をつ所り上て
湯ばよれとつよ鉈笠れく
ひけ人うしば同意さそ今ハせぬ
ありうえよあらら所同字もあく
所ハんひとしけよより二句可
嫌あり
とこハ菩提ぬがくせんぞうし
菩薩相ハ観自在天ハ化身之
んかそくや时所う所うん
鶯のうらかよ城と夢ばえ
関やのさうるかしや入りぬき
鶏ハ関にて付ぶりがハ雅様
善人ハがしと恵孫のまなあり
鳥ふと金もと頭丸てちよ
春日野のきよ紫風らげこ経

雪まのわかなは小鳥の餌こしらへ
すり餌はこしらゆるなり
くし巻の前で髪はしらう巻
れあふしの油やみかにかゝゆらん
嵐ハ人今すまねば古らや
池のあなたハ嵐もありますよ
いかにへのこれ出しかあらん
とりかもや親へつかう将軍
館にて忠のぶ佐藤兄弟
次信忠信か子孝の事なり
まことの縁ぞそるる薬師寺
そてあそびぬの袖はなかく
こ海とは女房ゑいことしきる
ありは小鳥に先すありつゞく
八房まとりおんあり
あるは勝手やころよとなれ
うハなりねあるし此は琴ぞ
生れたなりやなさるゝの上
わしの姫ごぜのことなり
此後ハ屏風格子の絹かけて
打ちらうし声を吹かれさ
醍醐味の只一しう雪かれ
五味は乾酪より蘇は醍醐味が
すぐれたるといふなり
あかきたありとへやまうん
まことはもまちともうするはてんじん

琉球国からくるなあれはなへ
ゆきあひにそ海うらと付
たり琉球ハ女の男(おとこ)はすこし国と
いへり
まど海たしかに松ハうすまさに
打(うち)やうそ後(のち)もころくばくらくら
碁(ご)倉丸(くわい)汁(しる)やちるこ物らん
ばらけと付より
波のと捨置ハくらしさぞ思ふ
小嵐(ねずこ)は雁(を)ゞ波ずても俤(おも)かげ
菊(きく)の波じはすなそくいへう
うし波ふすへそくいねにそ付し
山椒(さんせう)風有にも潤(さゝさ)やこはらん
親(をや)ハくりたくはこ孫ずると
あずさげの香(か)やこのむ古狐(きつね)
鼠(ねずみ)乃あずさげにそ狐(きつね)はつき
波ゞ児(ちご)とこ跡よりやうそ木に上り
太のやうなほ鳩(はと)しま木(こ)れハ
此句(く)の波くらもしやうなり今
すかりしべ
そくば(のう)のたすと波さむろまる白よ
波まゝ草(くさ)小二の古(こど)るあり
まれもまれつきもつぎさり
牛の子丸の先(さき)まで親(おや)よて組み
ふくころちまつなやかようこつずら
。年の子ハやまを逢丸くろずら

角(つの)ありとて世の婦女たのもしき
と云ふ人のはなはだうとまむ
我(われ)はまたくすと思ひけるか
たかし拗矢(や)も矢鹿さかしけれ
なすりの狐(こうし)女ならむや
むかしの前は犬追物(いぬおふもの)にてためし
射(い)なり
人がたしかに人に会ふ
橘(たちばな)たかくてあへ拗に鬼あざみ
胡椒(こせう)は名代の意氣が挟(あそ)び
あざみはこせうそれ合へ
されば八の字とは蛸ぞ先(うへ)に
一口にくふべき蛸(たこ)作始すまれ
思ふに一口用升之
ちりそれの餅をほしやす
蛸(たこ)は餅とは蛸にはねれ
まつてなり餅は合は入れしたる
て一口にくふべき蛸は鳥(ぶかん)なよ
て蛸によりれそくすく
久しくもの名はなまれ
ひゆうすの曲(こまく)はとゆふ筆表
わかりたがるや物と天人神
羽衣(はごろも)織の人なり
やさしき山は鳥居(あまご)に寂
今あれ秋も青八男(たこ)にして
よきなりかいとほふるやは

男こそ昔なればこそだてしたる時
の刀は今女のいましめにいづれ也
うまれ太夫ぞ籠城のしろ
宇治丸の鮓はあり役人みたて
とやされるを羽ぞけるあれ
人多内小飯がすくあれ也
それぬ飯らひげは特それ
那楠のふくはあれは鯰はで
あごやるは竹生嶋人
竹生嶋の住者あまづあれは
えらくてこごやはるあり
時は知てや揚ば左内かん
さらも打たいこうぞれ牧は書

ちびしてぞ妙殿のよれあと
周の文王太公望出て殿の射宝銭
おし事あり
天狗にもあれ祝が羽風生ぬらん
それ海の寺より古井すりこぎ
彼られて流人はいかなる山椒みそ
すりこんでみうけあり
今日もされねと鳩の書通
山鳥の尾へおれのひたるいたし
むりしていかがそて一句の理あ
し今八不角
扇よかけは練団がうる
花やちりそへの者あり。

みなとは扇なり
越のうらの図へハ猶も御し
かけてもわすれやりも武田が
ぎんせん拾ひ白ふりが蓋花のしゆきぞ
まりめし八武田花りんなり
無念なあるもうれられからか
ちうかなかをあ成人よぬすまれて
まうけとらるれるそちりも外
前向後うけてまるにいひけ
ゆけさな足これ行やうれ所なり
打向上を墓にみそくり
瞳あくつぶすこぬ先を身あまて
かくてこそ海はゆるなりまする
日瞳物出る旅人はへなりまする
とふらせてわことはなあり
打ものし
旅人や縮られぬかん渡川
こう成名とげこれ世つなり
功成名遂て身退くと云て花
蠡が舟よろひて五湖入行之
打ものし
かうろびや純推子にまぎらん
氣もいやも賣人か家の布
綿ちひく布かそて書とみて
打ものし
疊ぐるもまつまた紙しそ

いふひへうん抜敷のうち
気散いすまふひへ志てゐる
衣の上ハよと白ばこうか
人ハ皆腰をまだ持ゐて
例の用付なり
我らにまうなげられてゐる
お様ばかりよ小腰ばげられてゐ
まつすゞて川となり
のどのかわれハたゞふみじれ山
田子手浦に打出られハ茶やも見
若咲けや上のはなまり
上様の茶やなりの茶役田子浦
ハ当国へ参ににわ茶やハみなぬる茶
浩こまりあつハせ茶の湯
さうへしとげく
東道のどんせいよる物なるよ
下ゝハあなたまうすぞ儀ぬの
お様の後へにろびやにさして
しらに伝られてころびさう
あはお様のとなり
東道——
むかひよおうてつ也はうやき
羊にしのこ武蔵風頼のむさうぶと
ての代重羊のでうにたり
あげなり
又紙一帖うせたそにくろ跡

廿五

我宿やに時く地風ならひ湖
庵のわいねゑびす大黒
ゑびす棚に置たるなら
花も花さりゆても関守
逢坂の山乃坂なり大むかひ
まり白はころゆかしもち月乃駒
額白の馬なり
小ぎりかそめて法りと云へ
さ葉がねのせで法に大蔵
鬢いろいも切そくひおとす
武茶かの法の式のみ蔵
枝しらゆゆ祈なり
二日酔よりみえしわづらす

顔白の額あまりのちめて
御寿も浪やさらねこしかけ
法かそりとそりあすなり
結縫すば併せられ鉄
道者なう其沖つ
行やうら見えむしふ大せ
道者が年中ゆて風波ま
じあふなり
うぞそくうぞ卿全すれ
法被二のみそれむく
ぞう陣わもせんざくれ喜
浅翻よ元あし　二宮の
と為陣よなんなり

同心まちやさお志ち益庄九寺
松風にかの袖のつまは吹さし
此一句哥の上の句にて、ともし
まつ竹をあるはきちん
たゐ
声うきむさしひたちむさし
まつ風と能の名にそうなれ
なり
陰陽師うしに来てや海うらん
先へりてうつしまては
恋犬は武家の系りかいすりみ
ら川へ引も海はいなうち
あきまり

竹ゝ中楽しての心浮まし
切たるりちゃとゞちが小[illegible]
のがれぞいつやきれよのたから
芸活よやおのよれなかさそあ
つまと云
地体でりてぞ天之のがれけ
古郷から嬉よ手は父嬉
たるけの上よ来る川みの町
畠へかくろりられ行あまり
大白やえだよ恐てもし海ら
ゆえぐかいよいづはあさ宮
倉林がよあかや来ら浜が宮の辺
○玉みがくすなはち嵐が吹ちらし

催馬楽もあり金剛ぶしも有
乃名あり市谷山市勝閧とあれ
八嵐山にてあんしらひ侍
たとへもまたなりてもなし
飛鳥の祈もして心願
あとの寺の僧やだけの
うぶそりれあすらと海
玄蕃あり
まんやくと江戸ふぞふ
世の中にいとふまでとうか
ちんぼりそれに仕やめけ
式目小兵衛蔵剃除
すがとあり

さびしくもあらはびしくも
よろしと筆のけり不絶く
みこれぞとい猿楽でまうけ
みこ猿と太郎冠四郎
ふあり
岸のげにぞ何ばいふらん
住吉のに弥蔵縄の切
みしかえ吹きにれ乃大風
みしめあそとはるり
御の弟子いはんがや様
あかしてし三百余騎ひきつてで
雪のけがれまさきかひ
鶴は雪と云あり通平毎来

さあひて未だ有る又三百余続
ふなゆなり
山の大しぞ川よなかりて
行なよ字かくハ亀の跡もなし
涓ふ露もぬかゆらんさく
おあよ無覚の立入る佐言
日ふ八十て字書ともおん
萬ちらの諸付て付ゆく
世の中ふも志らぶきの書
入定の大師や風の引ぬらん
夜きせしてまるにみしくわ
草ま歩りのきりりめ
利

峯相よのぞやまぶねすな
付られの塩の丸ささと飛錢て
大かえぬま八きうてはやげなり
狐の鳴の飛錢なり
面白く橋のけろ松寄の庭　十六
茶の湯の桶のつきの非
此前句のすえハりのずきなな
といふふなれハ茶湯と付る
今ハ松寄とハ茶湯の事よ
きこゆまく茶湯とハ付べからず
いけ花のいけやしてぬなま海や
ともハゆやみてろしきの非
ゆあへ志らふなり

今ぞたしかに孝養なりけり
ちくらげて称名は衆生に教古仏
おのれなりとハ人の功なりけり
名ばかりぞ文字はさりて付句は成字
文字合はせすべし
志だしく柳や絶し敦盛
楊柳敦盛なりしの木と
云ひ付けり
御前でせんぎすりけるく
よもやうちさしぞ四文殊
唐柳子ばかりは細工者の業
さうれハ作りてなり
高種は大師名はさはまかり

らうかいの汁は菩提すけて
空海はしてしも高野は大師
あし付るにぞ南はいつ宗に旅之
地蔵尊は庵のめくみ土佐
ぢかく大くん菩薩り合之
夜なか月や出家の上よてらん
りんひよしたばかり夕良の宿
茨斗は何のもろもろ人かて
すみぞりもよのうたんと付けわ
為ん茶もかゝぬ高砂の浦
志かは風かふゝめ後の松か里
為ん茶をうくんぶかり菊はかし付べ
ず同宗よ敬なりけり深く六別之

ちかごろ蛸は何より爪くぞ
たこの入道あり
五更ばかりたしかも今ハなくなりぬ
さもなくもせて昔より出されし
なかく見しのちハ身すくむ
見えぬはらびハまなかくもなし
なり
日本においてハ蛸はよく
あいたる魚ハたこそや音ね
わくの国よりおくみくされ
あいたる美ハあくれ物なり
入道もあり入道もなし
是前句に事なるべし

そのころ七面村にある山のへつ
くれなくある所の西邪
きこへけるより人を中せし
城祇公の白光ハ悪る也しく
むかしは名付る所にてある
ある一面の理をきこえぬ時
ハ跳躍あり丸て用捨
貞信のすゝて持るか大豆程
御縦にすべハ小痿うき
被め痿あり縦の切力かや多
いそさぬなり
笑へハよりあけハなく之
子供母の毒の草稿たるはなくそ

此句無難をきらふ連歌之
連寄にしてもきらふ和歌ハ
うんとなれハ老葉ほわかよ
内にも海とありけりと云句
に宗祇とぶたつハみえぬ志けを
の山ときれと云発句ありそれ以
ぬすミて下手に家作なら猿楽
家に文筆なるほどなれた室て
も時代の権門の人の句なれハ
歳よおそれて入なるへし趣別
連寄めかもの句ハ挑治よみたの
まぬ事とさるへし
ゆや権現よ祈誓す侍るし

うらほんふめいろく如くにも人逸
此代たのむべしとあり
清むしき物と人ハ志りぬる
夕されふうすれ桶よ膝げて
東ハ清ぐもやなりて菁徐や
清ぐ之桶なり
おもかげんなりれ志を作書
春すそよ秋名ハすぐ之生方ねるで
此本家春冬ならすにあらず
おりひそてめよし札をいえや
大方新撰の札なり
子細四方よゆへ去よふしかか
おこせたかく孫入の芋以

茶碗はしや新茶たるらん
いもうら新麦みそ付く
土佐迄も下りうすれ京の
こんぎもぞうれちやうすゆあ夜
春書のためふ投書地に花へて
葉うすすと親をいうりおちすこ
もろ火のよぶり分教よ離て
てぬるやはいのかつうけの羽
春草れ分るきや桂面乃罡
七世の孫よたうひあふそ
うら鳴かそう低患けてたるあや
丹後縮の人抱たりなまり

うら鴨丹後の回あり丘下と結
ふちりなんあり
山伏のらの足書やゐからん
行なされ給えんのうだそく
神木ねまも初頭がやきた
神木よへ行状打教あり
書に守猫の耳さへ見やらん
下よれ書る俗虎れいきかひ
鳳よ筆師鹿れ文字誌あまかれて
こう氏字をおさうわこ云字抓より
あれたら虎の毛うけげ茎
ほのこ茶と芳我のすらひ移らん
毛よ乏移らいまん用付へ

章ハなそくもうろ頭巾
只我ハ章ひ称らハ針ニて付
今ぬのおけ風をハ抱とも
はなてハよ何し何ぬ丸今一
色いろ称ハうくハさめぬよの迄
代くふもあねハれのあまれ
これなる皿ハかけらく分り
持是と云釣あれハ乳とも是かれ
あり停まへあまけす四ツ付合之
路すふそ流れりしか
今よりやつて頓風おのよの路
折て貴ぬ例面のこうしかさ
絲の面みしのけま八頼むがれく
少々ふ新合掛あり
わまりちむさに風呂入り
志げのめがはなり風垣ぶ礼饒て
石由句新飛て
廣野山よ流ふ長陣
志げり垣ぶ陣氘がれさく之
為そのあくらぶつまむかせわり
生姓ぶ茶ぎれ上人わくべて
うこ山里風呂風呂よ例ちよ
風呂ふ子すふ例祈あり
酔ぬり時の苦しく
のま停まハ志よ柳ぎ上之氘
これハ問宗あり酔よ酒のうへ

ちゑくらべ

白菜斗はこのむだりせい
菜上戸と云名月あり
不動のうんやけひみだらん
一まぎりかゝすおかはらて持
小猿の京地やましく演ハさ
すか演のまけごゝろりぺりかゝ
ハ霧れゝゝあり山のちさ産く
十郎殺れ志ゝ目ありへし
大磯のとらや虎と云御陀羅尼
猫念かけてなはぜじぞう
禅僧の御たくふあれハ禅乃
字書かゝけさと御経ハ禅よ
馬眼よりはあれハぞかとふハ
ふ音あり
めでもかくれずまぬれし立
うら鶴の後の猿よりこゝ猿て
ひりでなくもし京の狗
狗よりこ猿でこけてわくえ
東ハめ何まで蚤ハめ何まできず
うづらきれ神も細工のからし柱
道のとうちハ雪れふるそいハ
雪うつきと付より
ふぎつなれん祝や出ハ重がや
力の摘よかくほはれんかる
ぶし床のよりさ花田ぬすきこん

はある経のくさしあひなきとなり
あまたあり
大般若よみ女の祈禱して
たとへハ巻第三十九もなく
此前句縁なけれバ別に付やう
ハあるまじけれど今ハならずとも
よ三のひとへく用ひなき事也
又他経と云も何経とあり
てよむ事ハ人けまゝ又大般若
なとハ心経とはいふハ同意に嫌之
都出若葉のうへえし
たきやうと他郷に充嫌之深氏
掛語も言ハ葉さ本之

あれ作さへハやハちらん
さいまゝハ骨皮とよう登れ
けうね刻やわしも新虎
筆骨ハ新骨皮ハ虎の皮さそ世
みとでまゆのあり考ぬれハ
けうね刻と年の絹にすらるゝ
寺も言ふてくの出来
手拭ハけまでの揚にあれ
古き拾ひやふみな不浄
ものハ薬湯にて拭とあり
石の名井ハまくら前にあると
新くと云
此一句寺の前と云なから八行

ちゑんと云たゝくびしてかよふ
らす
極楽浄土と縁の思ふやらん
やしだいゝゑやうされ如来母子
極楽たのもしあり
三の時のひの庄九をりしさ
かゝくへや楼よ鎮老関すへて
荷担ゆきゝうかせゝや逢坂
津の国のなから成近江なあがら
ふあすえ橋梁もさし関城も
お坂よとりゆ佐あり
是ぬよハ俗に大般若経
般若ハ六百巻ほせあれて
六百巻ハ大般若経ハうし也
八関付あり
孫八一倍よあ佐ゆもうしら
法ましく草にこれあり
袋ハこうか兎よふうく
太世と布袋ハ鳶につまのれて
同字別吟あれハ春日よ
ちかひとつもりて布袋ゆふ
とろハ付さとうろへし此執筆し
よく吟味して可然用捨す
あり
鼠の句ひ氣ともやすな
布袋ハ異なろへのやう

四十あげらみてをかへられ
し候あり
今よハあらて今よりゆるまし
蒼頡ハ丈と云字を作りて
ふでの書付まくはらしをとこ
古義めハ何変ヲ入とかくこ
書付同さめ花をもちてへき
のがれわ成変ニ音
あやまりなるに乱らめ玉ひぬ
うわらの玉藻だいの下あたまり
えんほいあるぬへの乃あり侍ん
養生者のそ成和言
のんぎかれあり
分からしてはりと入なり
このほさで笠きぬ人の声やなと
一樹のかけよ神やもゆらん
西やさりとはりの笠のぬぐ
みて神社やあれと知なあり
ぜひなくふもまらへおやせん
うぜんめらのかくへのかゝへ
日野の辺や此国の者ほとせつめん
ひのうぜんとすらり
佛よふゆと毛よう生けまで
極ちされたとはよ手風邪して
分さけやありし死かまうり
牛ゝりの牧童ほ志ゝよ祈く

いかりなあらく舟そつなくまて
すゝしくそれか守はかのこえそ
あけたつは行様の悪し業なり
前句の意は精の事の事也
なれなり
御所のこそ吐逆おこりすは
相楽おれたのし酒は百薬
最後の供一夜のびかわ
侍あその切腹一夜のびたは
なり
一その座にはなハされりの
海ほろびハ舟れなし業
小舟にきそうのいつかみ人
柿様小どりなれなりかな
きねはれハ起いてね人殊にし
えと思ひしとなり
あれ中かも知者ハまさかわ
葦れたかに葉遠方の気みて
紙もやるれてんおくれ候
銭あき心人よあ かたふのは
かたなり。お飾と付衣人なお
白小舟れころあは心人なり
ださ付く心もちうれハまろし
あよおなくも三月あまもた
算入の夕べよ隣ハ一たらし
座頭のあまりし先之とゝ中

座敷の一もしと云名目あり
居られず立もたれば
ぬけ...に移りて
玉江乃水よ淀川と三ケ月
室之の寿...付。...八
月あり
後るよきかんそれの...べ
碁将双六将棋...す
花見付あり...八
本喜ざあり...理不
弄雨可未到二此道
汝...
毎...の合戦あり

十七八...
小角豆は...
...
...あり
...
山...
門...頭
...あり
...
...
...
...
...

山王れ猿の上ハ叡山の山
西坂本にこの猿楽が立なり
猿がし山王の上よ御祭に成之
弓ハ弦より矢づけなりけれ
しみこの前にかけあくひも也
陵王酒やこれ惟喬
これたかの御子と申之
高野より天王寺に付は
大師太子ハむかしのふるき
文選や文句の点付やしげて
文選ハ梁の昭明太子文句を集
大師の作なり。ゑんなハ点ハ
て付なの弘法大師と。天台大師の作

庭訓や今でもかくと道
年よりは五月のお代一里さて
そのあと云ハ年あるかす合也
注文命あるくつ鑑はしぶかう
きの事あり
石山寺よりやましひ日の暮か
京より日の暮まで一里石山迄
五里あるなり
今滋賀からはやきゆく候
海の内のこざりうたれ候へまそ
それ周付入代時代よ作るよう
あゆらめ今ハ長嬉之
まことだ風情け人の十了書

こぼりハ小鹿とともなしかけり
ぐと付蓬莱ハてんのうちわたき
なり

思ひ出もつきはすれハ無し縄
此前句ハ離元なし
ちがふ刀ハあく月おちハ侍よ
うち打てやすくいはらね候豆の
刀小のみうんハからしとなる
折よ力とハ付けべし云々

柳も抽ておびたまふよし
ちゞの尺迹まできびんとやよ
此前句ハ得りてかとみえたり
又やすらかさハ事れ出の句也

やらかそ海りたるし
ら色帝やかそ川の百方
百方れうるひよあり
星ゝなれかそたちれらむ金
村の中小松金牛の波
那の寺れたこぬすそそこなし
時のたゞこハ牛の波なり
あらおそろしとやらなかなり
うしなハいろな射てやらん
頸のいらむれしがらぬもなし
射とめ寒気れいりゆよとり
きなり
ゆるりとめてハ又りしこ海り

浪人の的だく人も何かは紅葉みよ
名ある様なさされ共の大器
駿河の御帰りあわし此事之
次もむげもなき俤りかか
雨降よいも丸島やおちらん
仍え称し人のおそふ名月
いも名月なり
よみかよみぬかりてなき
古りたと思ふ謙信人の書
我門る人宇治丸のすし
むかしより宇治丸すしこそんと
まるてう法なり
人丸の家集おちされむまゆよ

ありの山家の志悲おもく
とかり矢て名乗あげし振舞
頼政の鵺射し矢も何さへの之
声やしの汁よきぶ御菓饗宴
雛やまた紙らくされハそうふまで
ふ高れ立花ともハ云ろなまれ
雛やさきハ焼き花付も旅之
寺に去んがちら良ら傾けされ
手ふあまりなし長刀ぐへつたと
此前句の尾りハ京んの句ら也
若ぐりしたることれ事なるハ
この付句も同意なり
宿人はまるんとく給やすゐ

寛文の比まで候て分あり前句
難波の浦にハいはゆる人こし
其時世あるは人の名人すめる
これや業楠のそこにかくれそ
名水の在所より見ゆる也
あらたに念仏りまたやうまし
となり
鹿の宛ころうかり立る
肉山に川火燈行のふそ
とゝ成れば名をたゞぬ
実れ見こみ様に成あり
せよそくせん候あれしよ座
あれぬ遠ハ哀れ登もかなゆて

せよみ聞せこ西や候らん
我せざしかれとの蝉ありせい
の家と又ハ乱候せこにあるへ
おやあやけても雑かりさぬ
これ素統そ
此お神人のそこうされそわ
あらせられて釈世らうまへ
釈世ハ元来伊賀国服部氏
ありこれハそとり同事ん
下手申楽の流にかぞけあ
拍子おもあらぬ程ならでを
はすで亦すてのハ言せ次
又のも作なる数もこさぬ事る

に狸がすむ社まであり
跡なきかのよきやうにいひしもいかゞ
二人大わらはにてきぶし渡橋に
張媛がすなはち勢ひ世の中
二人ハ張媛にて付ゆめならん
もしあり
冲虚も膝のかゞみよりすまし
海老なれ子の生やさまの数に〆れて
乃それてさうしは八橋の下
あびすひ川といふね言にあり
念卿ト雨にぬれぬかめ
軋のはる日をいろは笠ハ破れたる
浮世寧人やつくれなり

いせあと笠と付けり
贅見もよし見もあし
うち暦あらわれ書かはし
世おもろわしや蓋蓋と云
暦はあさきけ書に多し
かざりかぶりにとかれるかな
新発が二王の眉に毛より
名の草やあの西川の関
小法師がなる見莫にほ返
霜は思ひハおこなひもせぬ
甘蔗とて
渡ハるともなを井けるは上て
表記とよしれ連ありけり

やくそれ坊の癖れ噺しさ
八幡山よ常升坊とあり
ちきさんとするへ八不たともしら
一 無縁そ
みちよ出けさしも神風よ祢て
無縁そよて丸連歌あり
すきはなきやあれおやけ
袖ハすんれありおかやけハ手元
のすゑなすあり
行蔵ちるそれやるゑん
衍り障子らん貴に心得て
淡気が針やあくは山寺
行ろと代狗よとりあれ耗焼

うらん山寺文行べし
よしれ法師ハ山がうくとも
いるれハ児の思たし心えん
大豆の粉からむしされ長浴
まめれたらでそび団子ハらう之
水白あすりハ人喜もせん
無縁え
代狂ハそうかくと思ひしよ
布施ぬ代屋り無傷も死かり
亡者の不世代屋りおきさ帯
とむりしよき傷も死あれ
たとあれ
思ふ子寺とさ八いろれ従りかわ

妄語（まうご）とは　山人の薪（たきゞ）に花折添（おりそへ）て
妄語とよくにたる事あり
大度（だいのう）なるやうなむ幽霊（ゆうれい）
忠度の装ひ出立（たち）の術（じゆつ）なり
みだりに言（しく）もおもしからず
我（わが）おや兄死（しし）ぬ時にもへつらひて
いふ悪語（あくご）なればとて父母（ぶも）よ
悪口（あつこう）とは、以よあしく儒者（じゆしや）は云
みな仏（ぶつ）御（ご）仏（ぶつ）じやうも不孝（ふかう）なるは
いましめたまふ事なりその上（うへ）
此文字なりとても人の俗語（まんご）
よからぬ事なれば

然ば禅者（ぜんじや）何（なに）とて了悟（りやうご）して
入ならば。和（わ）哥（か）は云（いふ）にたらぬ連（れん）
歌（が）もいろみなる人の狂戯（けうらい）の
ちりとなるやうに。こゝろ入ならば
八行の名題（ぞよ）あれても妄語（まうご）す
なりと下郎（げろう）人のおやれとせめ
てあはたゞしくば。じるからも根付
んもまたゞへし。我おやなるは
いそうがらうべき。それ経た
りと思ふ事なれ。あはれの八
人のみなそてはあはれまじ。畜生（ちくしやう）
ふもおとらぬあはれのなり。妄（まう）
のこゝろよく吟味（ぎんこ）なくは

鑿丸鐁なそでハかたなせぬ人
まりとをりあるべしらく
ぎんこあるへし
鑿じ稀これがなハ小いから
おやいさらも稀こにいられ
となり

報身ありもしたらうき
月の御以よりござさて
千手雲には頭身もとつかわ
千手千眼ハかそんあんありたる
地いしくハ頭身なり
木もともちハりしちれ
人まおかしかし拙ハ分ざのほう

三河ハみかハ老の三界
三河ハむかし八人のもぎさ以
こゝ河ますなり
ま成かぎりてハおびらうん
ぎきうらし生まかん彼ハうござきそ
なつむきうれ能堂番れなり
能堂らうじをそうり
花の下にもまつりけ庭

無縫言
口経法ちんちりりちんと捻そ
ちりぬちんずなちおとこふり
自慢れのハもげ地じ移り
上なあり

一二三と文字などそなへたり
雪ふりにはけあなたれをかれ
座敷のかくしにや猫宅のよ
座敷の房れまがひあしだて
よつえはふと云事あり
たいぞあまつしかぞあれ
婦の子風生家よ女さいよ　て
重代の太刀維ふわたさはん
女子にも太刀添しかるし
帰たくやそもう𛂞人も家
めふ志ぞれし　縄の俤云
ありま山湯坪て布やぬすむ
育る九湯女が湯入はらゑくし

志ごはとあり
遠まゐれん待毎にぬまとつ
うら笠はし合をそくゝ世
両時用付あり両笠にも付べし
茶にけてうや家松茸
うしもせず花茸につれたれど
つまみにあり
論は遠もふくべき之
いのまやいのれ弁財天神
河く鶴いつ我が身なあるる
蘇鶴八弁財天で神ハあま寺
みて付侍り云ゝ

右宗鑑の犬筑波れ名句尤
おゝし今此狂吟見るも幸
ゑせハ当時きらふ事なり
行まじ此ゆへよ同意用付
金言句をも小判の詞付
待りもそ志なすハ侍らバ
時代のうち何なき上手作
ハ今の代よ及者あるべから
ず句新らしてそらバ難勝業
小あつかうし此次よ作ぬ句
古代の理よ付て二句目の
あつやしれ侍る発句哉に
あるおゝ計也山崎宗鑑バ

残るとても行末ハ濁るかも川
遂ハ此帝ハ淀川と名付る
哉

吾以屯

宝永戌初春

二條寺町
野田弥兵衛開板